

僕は、小学校低学年の頃「LD（学習障害）児」として診断を受け、それなりの生活を送ってきた。成長するにあたって健常者とのギャップは広がるばかり。

そんな僕だったから、父は僕を気にいるはずなかった。

小学生の頃には共に行動はしたが、中学校入学した頃には、父が僕を避けるようになっていった。そして小さな家にもかかわらず「おはよう」の挨拶すら、声をかけてくれなかった。

僕は、たまらなく淋しかったなあ。

しかし、そんなことで悩んでいられないで起った。

それは僕が中三時、父が「駆け落ち」して家を出た。

ショックというより、無責任な父が許せなかった。

急ぎよ、母が細腕で家族を養うことになった。そして当時、七十八才の祖母が同居することになり、家事全般を引き受けてくれるようになった。

その頃、三才上の姉が「鬱」を発症。未だ治癒ならず。

そんな家庭環境だったから、僕は必然的に「介護」の道へとすすんだ。

不器用で何事においても鈍な僕は、専門学校では、クラスメイトの何十倍もの努力・忍耐、そして根気が必須であった。

それを知ってたか……。

祖母は、僕のために「着衣や患者のモデル家事全般」を辛抱強く、何度も繰り返し、指導してくれた。

その祖母の尽力のおかげで僕は「介護福祉士」の免許を取得できた。

その年に「成人式」を迎え、運良く「車」の免許も手に入れることができた。

初めて人から『よく頑張ったねえー』と褒められ、心から祝福された。

ほんに嬉しかったなあ。

この喜びの報告、そしてこの祝福を一番に受けたのは実は、「父」なのだ。

父が知っている僕は「のろまで不器用、何するのにも鈍臭く、駄目な奴」というレッテルを貼られていたからだ。

しかし今や、僕は、あの頃とは違う。

高齢者施設のデイケアで「介護福祉士」のプロとして高齢の方々のお世話をさせていただいている。人生の大先輩である高齢の方と、いろいろ触れあっていくなか、僕は気付いたのだ。

きつと父もあの時、何かに悩んでいたのではないだろうか……。いろんなストレスが積み重なって行って、ああいう結果になってしまったのではないだろうか。

少々、生意気のようなのだが、社会人になった今、人間の弱さや、はかなさ、もろさが、ある程度、解釈できるようになっていったと思う。

僕の中で、そう考えると、あの頃の父に対する憎悪感が徐々に緩和されていつている。そして今や、僕にとって父は、憧れの存在に最も近いのだ。

父の中に僕は、いなくとも、僕の中には、いつも父がいるのだ。  
会いたいと思う。

拝啓

親父殿

親父、元気でいるか？

俺は、今年八月でもう、二十三才になったよ。

親父が家出て正直行って、その存在すら、俺は許せなかった。  
でも今は違う。

俺は、もう社会人。今「介護福祉士」として毎日、汗を流して勤務している。

施設内では、俺が一番若く、一番体力あり、体がでかいということが高齢の方々からはモテモテさ(笑)。

親父が去って、おふくろから聞いたんだけど、俺の名前、親父がつけてくれたんだってなあー。

「ゆうすけ雄介」俺、とても気に入っているんだ！

「ゆうすけゆうすけ」の「すけ」は「介」で、介護の「かい介」だもんなあ。

まさに将来を見込んで親父は、この名前を付けてくれたように思えてならないよ。だから、俺にとって、この「介護福祉士」の仕事天職だと思っている。

『ありがとう!』

俺にくれた最高のプレゼントだ。

「親父」

心で何度も叫んだこの言葉だ。

あの頃は、「おとうさん」だったもんなあ。もう、そういう年になったんだよ。

一度は、声に出して叫んでみたい。

『おやじ〜』

聞こえるか？

“ 初月給、父に土産の 生一本 ”

親父は酒好きだったなあ。俺は酒が飲める年をとうに過ぎた。威張った顔で返盃できるといふわけさ。

「いつか、差向かえで親父と酒を汲みたい腹わたに沁みる酒を」と思っている。

俺、初めての給料日に、親父といっしょに住んでいた頃の兵庫西宮・灘五郷にしのみや なだちご郷「山田錦」やまだにしきを買ってきたんだ。  
おばあちゃん&おかあさんが

『あら、まあ・・・』

目を丸くして笑っていた。けど俺は満足だったよ。封を切らずに大切ににとってある。床下にねむっている。

俺は、ここにいます。

もし会えたら笑顔、大声で叫ぶから・・・。

『おやじ〜』

あなたの息子よりー